

ライフストーリーとアイデンティティ

—家族関係からみる自己形成—

Life story & Identity

—Self-formation as seen from family relations—

木村 恵理

Eri Kimura

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 現代社会研究専攻 修士課程

キーワード：ライフストーリー、アイデンティティ、家族

Key words : Life story, Identity, Family

1. 研究目的

現在、『ファミリーヒストリー』というドキュメンタリー番組がNHKで放送されている。この番組は、不定期放送も含めると2008年から約8年続いている。長年にわたり放送されていることや、著名人及び視聴者からの反響も大きいことから、人々が共感し得るものが『ファミリーヒストリー』には備わっているのだろう。「アイデンティティを捉え直す」という制作者側のコンセプトを踏まえると、ルーツを探るという行為によって確認されるアイデンティティと、そこに表れる帰属意識への関心が高まっているのではないだろうか。

しかし、運命や人生の方向が家族（先祖）により決まっているかのような認識と、それを受け入れようとする風潮は、ある問題を家族という枠組みへ包括してしまう危うさもはらんでいるように感じる。私自身、両親から「流れや繋がりも大切で、親類が就いている職業や進学先など、縁がある環境は居心地が良く感じられ、自分に合っている確率が高い」ということを幾度となく言われてきた。その言葉を受け止めつつも、困惑し、窮屈さを感じてきたのである。そしてこれまで、大小問わず自分の選択に葛藤が付きものだったが、その葛藤に苦しむ時、上記の言葉と共に両親の存在がほとんど必ずあったのだ。

そこで本研究では家族の何が私のアイデンティティやライフコースに要因として働いているのかが明らかにすることを目的とする。

2. 研究実施内容

第一章において研究動機を述べ、第二章では、先行研究として三つのことを述べる。第一に、アイデンティティの概念を確認するとともに、それに関わる「個性」について三つのタイプに分類し、提示する。第二に、アイデンティティと家族の関係性を論じる上で、自己の経験を語ることや自己を対象にした研究について確認していく。そして最後に、分析方法として用いるオートエスノグラフィーの手法の特徴について述べる。

第三章では、「私」をめぐるストーリーとして、父、母、祖母のインタビューを交えながら、現在に至るまでの家族との関わり方を整理し、記述していく。ここでは、「家族における会話パターン」、「認識のズレと記憶の曖昧さ」、「自己の不安定性を生むサイクル」、「女性観」の四つのパートに分けて論じる。第四章では、これまでの分析を整理し、今後家族とどのように関わっていき、アイデンティティはどのようなものとして捉えるかということをもとめていく。

私のアイデンティティやライフコースを決定づけるにあたり、家族の何が要因として働いているのか明らかにすることであると同時に、私が家族の存在を通じて常に感じていた葛藤の要因を探るものでもあった。

(1)父と母へのインタビューにより、両親の「私」に対する反省や後悔が含まれている点と、両親と私の三人の会話における孤立という二つの会話パターンが確認できた。私の体調不良を通して父と母はそれぞれに、自分の行動や選択を後悔してお

り、その自責の念を語られるたびに、一体今の私は何なのだろうか、私が経験してきたことはなかった方がよかったことなのかと、空しい気持ちにさせられていた。

両親との会話における孤立では、母による一種の裏切りが起こることで両親対私という構図が生み出されていた。ここには家族という存在に対する理想や、「母親とはこうあるべき」という固定観念が私自身の中にあっただことがわかった。「裏切り」という表現は、母親は当然娘の味方をしてくれる存在だろうという考えがあったからだと考える。

(2)認識のズレや記憶の曖昧さについては、出来事に対する捉え方や記憶の相違が見られた。両親の印象に残っている出来事でも、その出来事を中心に居たはずの私が覚えていなかったり、逆に、私の価値観をつくったような印象深い出来事でも、そのきっかけを作った両親が覚えていなかったり、また、両者覚えている出来事でもその認識にズレが生じていた。

(3)自己の不安定性を生むサイクルとしては、親や、親が語る親類のまなざしと自分の意思が天秤にかけられたときに、これまでの私は選ぶ基準が「すべきこと」、「ふさわしいこと」であったことが根本として考えられる。自分の意思があっても、「よし」と言われないうり実行に移すことができなかつたのだ。そこには、自分が「家族」という枠組みの中からはじき出されることへの不安があった。「家族の傾向や繋がり大切にしたい方がいい」と繰り返し言われることで、自分の行動への自信が消失していくサイクルが生み出されていた。そして自分の主張をしたり反論をした場合では、父に私の意見が飲み込まれてしまい、反論という手段で自分と父とを切り離そうという試みを失敗に終わらせていたのである。何をしても肯定されず、反論も果たせないならば、ある程度許されるであろう折衷案を提案することで自己を守っていた。

ここで、三つの意思表示のタイプを提示する。

①明確な欲求があり、それに従い行動するタイプの「主張強固型」、②明確な欲求がなかったり、その程度が低いタイプを「主張薄弱型」、③明確な欲求はあるが何らかの抑制により行動には移さない「主張抑制型」である。これらタイプを上記の分析を踏まえたうえで自分に当てはめてみると、主張や反論といったかたちで自分の意思表示まではするのだが、その意思には従わず、折衷案を取る傾向にあるため、「主張抑制型」に当てはまる。

3. まとめと今後の課題

これまで明確でなかった会話のサイクルや、会話における役割が明らかになったことで、ネガティブなサイクルを阻止したり、打破したりする余地は見つかったのではないだろうか。解決策となる具体的な行為例は現段階では挙げられない。それは、会話をしていく中で試行錯誤していくしかないものである。

父や母が想像する「私」があったように、私自身も父や母、家族に対する理想や固定観念があった。家族を家族と捉えず、目の前の出来事や状態に気づき、応じるということを家族との関わりの中で実践していくことが重要なのではないだろうか。また、オートエスノグラフィーの手法による研究や、自己を対象とした研究の課題は、自己との距離感が図れなくなってしまうこと、つまり客観性に欠けるということではないだろうか。しかし、自己の経験や感情とそれらが生じた際の周囲の反応や状況を記述し、分析することの繰り返しは、単なる研究の手法というだけでなく、苦悩や葛藤など大なり小なり躓きを感じたときに、必要な解決策になるのではないだろうか。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

②学会発表

③図書

以上すべてにおいて特記事項なし。